

持続可能な社会のための社会 - 環境アプローチの検討

片倉芳雄¹・武田徹¹・篠田真理子²・松村正治²・上村英明¹・藤田智¹
(¹人間社会学部人間環境学科教授、²人間社会学部人間環境学科准教授)

2014年3月31日

はじめに

本研究は、これまでの持続発展教育（ESD: Education for Sustainable Development）を批判的に検証するとともに、今後のESDのあり方として「社会-環境アプローチ」を新たに導入し、それが環境問題や社会的不公正などの問題に直面している当事者や当事者を取り巻く自然環境、社会環境、メディア環境などの諸アクターにどのような効果をもたらし、持続可能な社会の形成にどのように寄与することができるのかを、実践的に検討しようとしたものである。

これらの実践的研究を通して、環境問題及び社会的不公正の問題群を改善するための方策を探り、地域社会における平和文化を形成し、持続可能な社会のための教育を構築していくことを目的とする。

「社会-環境アプローチ」とは、研究者が当事者を取り巻く環境を自然環境、社会環境、メディア環境の観点から総合的に把握・理解するとともに、環境倫理や社会的公正などの価値観から当事者との対話を通して問題点を発見し、当事者は研究者や他のアクターと関わりつつ「当事者研究」を行い、ソーシャルメディア等で情報を発信して、問題点をそれまでとは異なるものへと変容させていく道筋を当事者自身が見出していくための方法論をいう。

本研究では、① キリスト教の立場からハンセン病・障害者・女性などの人権や社会的公正について思索・研究していた故荒井英子氏資料のアーカイブ作りへの取り組み、②北海道苫小牧東部大規模工業基地の現状と周辺社会・環境との関係を視察・調査、③ 同時に、研究グループの各構成員が個別研究を深めるために、現代社会学科セミナーの開催、などを行った。

1. 荒井英子資料のアーカイブ作成

1. 概要

2010年11月までに荒井英子准教授の収集した資料を将来、ハンセン病、キリスト教関係研究に生かすべく公開に向けた整理を行った。整理作業は平和文化研究所助成を受けて、現在、法政大学環境アーカイブス職員であり、恵泉女学園大学大学院在学中に荒井英子准教授の指導を受けていた大町麻衣が担当した。

2. 整理目的

荒井英子准教授の研究室にあった資料、および自宅に置かれていた資料の活用に向けた第一歩として、「荒井英子資料」の全体像が見渡せるような簡易目録を作成することを目的とした。

3. 整理方法

1) 現在までの資料状況 (図1)

- ① 関本恵美子准教授が中心となり学生らに自由に資料を譲った。→学生らがどの資料を持って行ったのかは現在では不明である。
一部は荒井献氏により一部が古本屋へ売却された。
- ② 残った資料のうちハンセン病関係のものはダンボール箱へ入れられ南野校舎へ移された。
- ③ ハンセン病関係資料のうち、図書は図書館が引き取り既に目録化済み。
- ④ 残りがキリスト教センターおよび関本先生研究室に所蔵されていた。

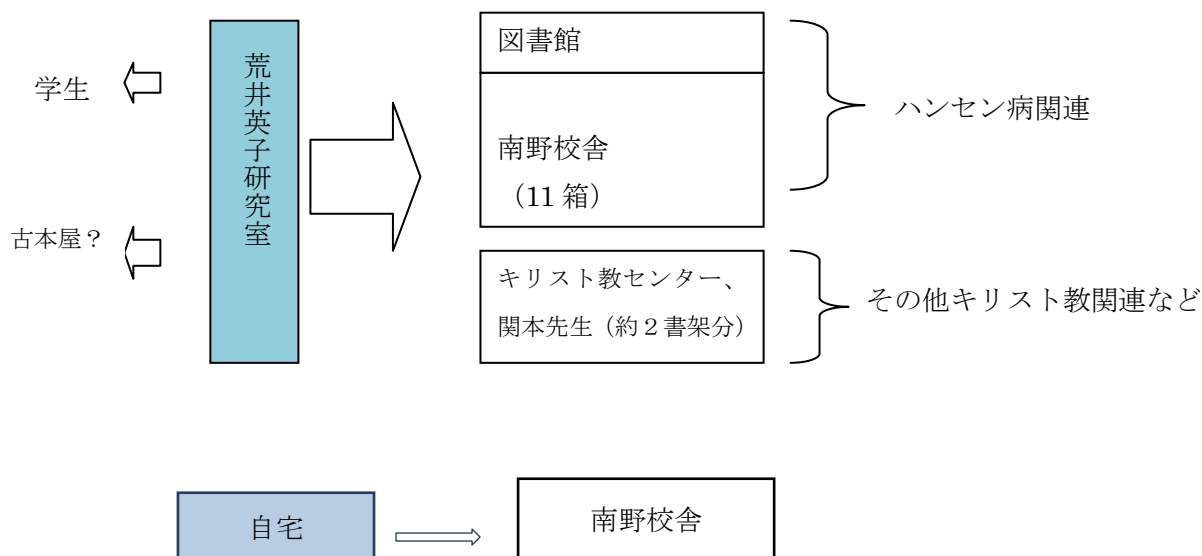


図1 荒井英子資料の流れ

2) 手順1：概要調査

南野校舎、キリスト教センター、関本先生研究室、自宅の三か所に保管されていた資料について、それぞれ概要調査を行った。

南野校舎に保存されていた資料はダンボール箱や本棚で保管されていたが、まずダンボール箱や棚に番号を振り、資料の所在場所を表記できるようにした。概要調査ではおおよその資料数や資料の内容、形状、保管状況などを調べ表にまとめた。

3) 手順2：目録作成

荒井英子資料はファイルや図書、文書のほか VHS などから構成されていた。これらファイル一冊、図書一冊などをそれぞれ一つの資料として扱い目録を作成した。また、資料一つ一つへは短冊状に切った中性紙に鉛筆で番号を書いたものを挟むかたちで管理番号を付与してある。目録は、アクセスの容易さや今後のデータベース作成のための汎用性を鑑み Excel へ入力した。目録の項目は個々の資料の管理番号や、タイトル、作成者、年代、形態などの基本情報のほか、ふせん情報なども含めている。資料には荒井英子氏によってふせんが貼られているケースが多々あり、資料の劣化を防ぐためそれらのふせんは全て作業者によってはがされているが、目録のふせん項目でふせんが貼ってあった場所とふせんへの書き込み内容を確認できるようになっている。

タイトルについては、基本的には資料外部に記されているタイトル表記を踏襲している（タイトル表記がない資料については〔 〕（全角ブラケット）付で入力した）。

南野校舎、キリスト教センター、関本先生研究室すべての資料についての簡易目録が完成し、全部で 830 点となった。

4) 手順 3 : 保存処置

劣化が見られる資料については、中性紙封筒に入れるなどの処置を行った。

4. 今後の課題

1) 詳細な目録作成

今回はファイル一冊を一資料として扱っており、そのファイルに綴じられている資料一点一点については目録からはアクセスできない。そのため今後はより詳細に資料の内容がわかるような目録へと更新していく必要がある。

また、現段階で目録は「ハンセン病関連資料」、「キリスト教・ジェンダー・死生観・戦争関連資料」、「恵泉関連・学生作成物・荒井氏個人資料」の三分野に大別されているが、資料の構造についてより詳細に分析し、「荒井英子資料」のコンテキストを崩さず、かつ利用者に分かりやすいような丁寧な分類を施す必要がある。

2) 自宅資料の目録化

今回のプロジェクトでは、荒井英子氏の自宅資料についても概要調査を行った。自宅資料についても「荒井英子資料」の対象とし、目録化を進める必要がある。なおこの自宅資料はとりあえず南野校舎に移動し、保存することとなった。

3) 保存管理

資料は現段階では南野図書館、キリスト教センター、関本先生研究室でそれぞれ保管されている。幸い劣化がすすんだ資料はそこまで多くはなかったが、可能ならば資料保存に適した湿度を保てる場所での保管が望まれる。特にキリスト教センターは湿度が非常に高く、資料の劣化が懸念されるためできるだけ早急に資料を移動する必要がある。

4) 公開体制の検討

「荒井英子資料」をどのように活用していくのか、恵泉として検討する必要がある。生前、荒井英子氏がのぞんでいたように必要とする人がいつでもアクセスできるように広く公開されることが望ましいが、そのためにはスペースの問題、人員配置の問題などが生じる。また、著作権や個人情報保護の観点などから、公開できる資料とできない資料の選別作業も必要である。

II. 苫東調査

1. 調査の概要

日 程：2014 年 3 月 7 日～3 月 9 日

場 所：苫東コモンズ（北海道苫小牧市）、萱野茂二風谷アイヌ資料館、平取町立二風谷アイヌ文化博物館（北海道沙流郡平取町）、アイヌ民族博物館（白老町）

出張者：松村正浩、篠田真理子

2. 調査の目的

本研究「持続可能な社会のための社会 - 環境アプローチの検討」では、総合的に北海道苫小牧東部大規模工業基地の現状と周辺の社会・環境との関係を合同調査することを目的としている。今回はそのための予備的な調査として位置づけられる。

3. 調査対象と背景

1) 苫東開発とは

苫小牧東部大規模工業基地（苫東）は 1960 年代末に始まり、1971 年に「苫小牧東部大規模工業基地開発基本計画」が北海道開発庁により策定されてスタートした。石油・鉄鋼産業を中心とした計画が時代の変化に対応できず、計画・造成された 10700ha もの土地の分譲が進まなかったため、経営主体である苫小牧東部開発株式会社は 1990 年代末に巨額の負債を抱えて経営破たんした。1999 年に株式会社苫東に運用が引き継がれ、自然と調和した開発が現在の課題となっている。

本研究では、今後の社会と環境との持続可能な関係を考えるために、このような歴史と課題を有する苫東開発を総合的に考察する対象の一つとする。

2) 苫東コモンズ

苫東工業用地内に存在する豊かな自然を守り、利用する役割を担っているのが NPO 法人苫東コモンズである。もともと苫東開発は、総面積の 1/3 を緑地帯とする計画だったが、現在でも石油備蓄基地や発電所、工場と整備された道路の間に、分譲が進まなかったことにより広大な森林、湿地、河川、緑地が広がっている。

苫東内の土地は、開発のために買収され法人所有になっているが、従来から慣例として住民の土地利用が行われていた。このような慣習をコモンズとして捉え、自然の恵みを享受しつつ環境保全を図ることを目的として 2010 年に設立されたのが、NPO 法人苫東コモンズである。自然の賢明な利用（ワイズユース）と住民の関与、企業や行政との関係性、開発との調和などさまざまな点で本研究にとって興味深い活動であると言える。

3) 二風谷ダムとその周辺

1973 年、苫東地域に工業用水を供給することを主な目的として、沙流川水系の多目的ダム（二風谷ダム、平取ダム）が「沙流川総合開発事業」として開始された。その後、苫東での工業用水需要が予定を大きく下回る事があきらかになっても、治水や発電などの目的を付加して計画が進行した。二風谷ダムの計画地は、アイヌの人々の聖地であり、チプサンケと呼ばれる伝統的行事の場でもあった。土地買収に伴う補償交渉が進行した後も、アイヌとして最後まで土地収用に応じなかった萱野茂と貝澤正が反対運動を続けた。国は強制収用を行ったが、両氏は「二風谷ダム建設差し止め訴訟」を起こした。1997 年、二風谷ダムが完成した後、札幌地裁の判決が下り、土地収用は違法とされたものの、ダム自体が建設済みであるとして請求は棄却された。しかし、この判決の中でアイヌ民族が先住民であることが認められ、民俗文化を享受する権利が認められたことで、北海道旧土人保護法の廃止と、アイヌ文化振興法の成立へとつな

がった。

一方、二風谷ダムより上流に予定されている平取ダムは、2009年の民主党政権時に一時建設計画が凍結されたものの、2013年に建設継続が決定し、道路及び基礎工事が進行中である。

こうした背景と経緯を踏まえ、本研究では、自然環境とアイヌ文化の伝承および地域社会との関係について、持続可能な社会のありかたを考察するために調査を行うこととした。

4. 調査結果

1) 苫東コモンズについてのインタビュー

日時：3月7日 13:00~17:00

場所：ウトナイ湖野生鳥獣保護センター および苫東コモンズ一帯

インタビュー相手：草苺健（NPO 法人苫東環境コモンズ事務局長）（図2）



図2 草苺健氏へのインタビュー

① 苫東開発を振り返って

北海道の中での雇用を生み出す効果があった。

苫東工業基地は札幌圏の中にある。

1998年ごろから背景が変わってきた（経営破綻破たんのこと）。

苫東開発は現在ではネガティブな清算という見方から買収した土地の状態が維持されているという見方へと見直しがなされているのではないかと。むしろ里山が残っている土地である。

ウトナイ湖千歳川放水路がストップしたこともあり、開発が自然かではなくワイズユース（賢明な利用）への方向性ができてきた。

所有者が放置しているところを管理する。

開発の内実がどうだったのかの検証が必要。

苫東開発は本州の工業基地での公害という結果を受けて厳しいアセスメントが行われている。

開発によってマイナスの影響を受けた人はいないのではないかと。苫東工業基地 1万 haのうち 5千 ha は農地。

もともと寒冷で土壌がやせ霧が多いため農業が難しい土地で、補償金をもらって出て行ってかえってよかったという人々の話は聞く。

経営は破綻したが、プロジェクトは失敗したとは言えない。

② 苫東環境コモンズに係わっている人々

ボランティアの人は農業者、工業者、自営業者、獣医など、さまざま、おおむね1時間圏

内に居住する。

誰の土地でもなかった無主地の利用慣行（ハスカップなど）を続ける。

③ 森林管理の方針

決定権は会社にある。

しかし 40 年の経験を持っていることからアドバイスをする。

それはほぼ取り入れられる。

苫東の保全緑地は全体の約 3 分の 1 の 3400ha とされていた。

1000ha の緑地はずっと残すことになっている。

最初は樹木がない土地に木を植えることから仕事を始めたが、非常に困難だった。

5 月 25 日を過ぎないと新緑にならない凍土（地下 50 cm の深さまで）、海から来る塩害など、これらのことから林業に適さない。

ハンノキからミズナラへ。

つた森山林は残すという条件で買収した土地（全国植樹祭が行われた）。

「和みの森」プロジェクトの拠点。

それはこの土地を知っているものならではの経験値があるから。

苫東の何でもない森の守り手である。

④ 森林管理の方法

全体的には択伐 30 年ぐらいで切る。

送電線の下は皆伐をする。

北部では林業を 100ha くらい行っており、皆伐している。

風倒自然復元地は「賢い放置」自然復元を図る。

⑤ 森林セラピー

森林セラピーとは謳わない。

最初はトヨタから相談を受け、うつ病を患う社員に対する対策として考えた。

ドイツでクナイプ療法を見学した。

大島山林では歩く人が増えた。

精神神経免疫学では効果のほどを測定している。

療法というより、自分の気に入った森林風景＝マイフォレストを自分で見つけて歩くことを勧める。

明るい森は暗くうっそうとした森より安心感を与える（人は危険を恐れるため見通しがよい場所を好む）そのような森を設計する。

⑥ 今後の見通し

未来永劫、苫東環境コモンズが続くとは考えない。

土地は所有者がいるのだから、将来的にどうなるかはわからない。

現在ある自然を利用・活用するために託されている（信託）と考える。

2) 二風谷ダム（図 3）についてのインタビュー

日時：3 月 8 日 10：00～12：00

場所：萱野茂二風谷アイヌ資料館

インタビュー相手：萱野志朗（萱野茂二風谷アイヌ資料館）

① アイヌとしての活動と上村英明さんとの関係

1993年、国連で開催された先住民に関するワーキンググループで知り合う。
アイヌペンクラブを結成、アイヌタイムスを創刊。

② 二風谷ダムへの態度

1988年の収用委員会には意見陳述に行った。
反対運動は地元では盛り上がっていない。
志朗さん自身は参加しなかった。
町営でアイヌ語教室を行っている。
町から給料をもらっていて反対するのはいかながなものか。
結局食べていかなければならない。
農家には農協の借金があり、買収されることに抵抗できない。
町長は、3%しか反対者がいないと発言した。

③ 平取ダムに関して

平取ダムに対しては条件闘争を行う。

NACSJからはアイヌ民族党（萱野志朗さんが党首）に、反対メッセージを出してくれと言われたが断った。

ダム建設に対しては、アイヌの価値観に触れる、と言うしかないのではないか。
チノミシリ（聖地）は察知することができる場。

3) 平取ダム建設予定地見学

現在は大型の工事車両が入り、基礎工事中である。



図3 二風谷ダム周辺地図

2007年12月2日 地域の伝統的な祈りの儀式であるカムイノミを行う。

2009年10月 建設見直し発表。

2013年1月 国土交通大臣による対応方針『継続』の決定。

2013年8月 「二風谷ダム及び平取ダムの建設に関する基本計画」の変更（工期）。

2013年8月 平取ダム工事用道路工事着手。

2013年12月 平取ダム基礎掘削工事着手。

4) 萱野茂二風谷アイヌ資料館見学（3月8日）

国指定の重要有形民俗文化財「北海道二風谷及び周辺地域のアイヌ生活用具コレクション」が 919 点収蔵されている（図 4）。2013 年萱野茂顕彰コーナーと書斎復元コーナーが新設された。

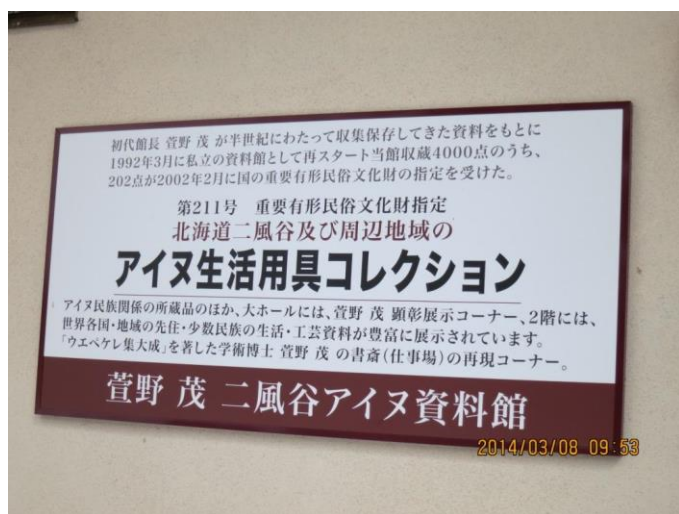


図 4 萱野 茂 二風谷アイヌ資料館

5) 平取町二風谷アイヌ文化博物館見学 (3月8日)

国指定の重要有形民俗文化財「北海道二風谷及び周辺地域のアイヌ生活用具コレクション」が 202 点収蔵されている（図 5）。映像、音声資料なども多数収蔵され、視聴可能である。



図 5 平取町二風谷アイヌ文化博物館

6) FM ピパウシ出演 (3月9日)

萱野志朗氏が行っているアイヌ語を交えたミニ FM 局「FM ピパウシ」のインタビューコーナーに松村正治が出演した（図 6）。その様子は HP 上で聴取できる。

<http://www.aa.alpha-net.ne.jp/skayano/menu.html>



図 6 ラジオ収録の様子 (右) 萱野氏 (左) 松村

7) 二風谷ダムとその周辺

二風谷ダム建設、および建設中の平取ダムによるアイヌの人々への文化、環境、生活への影響はアイヌ文化環境保全対策調査委員会によって調査が行われた。(図7)

「アイヌ文化環境保全対策調査委員会報告について」

http://www.mr.hkd.mlit.go.jp/mrken_works/chisui/sarugawa_sougoukaihatsu/biratri_dam/biratri_kankyo/kentou_yoryo/pdf/01_houkoku.pdf

「アイヌ文化環境保全対策調査室通信 monthly ランコ」

<http://www.town.biratori.hokkaido.jp/biratori/nibutani/html/pasuiN.htm>



図 7 アイヌ文化環境保全対策調査総括報告書

二風谷ダムによりチプサンケ（丸木舟の親水の儀式の場）は水没し、チノミシリ（祈りを捧げる場所）も破壊されたが、文化的な景観はいくつか残っている。

① ウカエロシキ

オキクルミカムイが三匹の熊を岩の姿に変えたとされる岩。二風谷ダムの岸にある。(図8)



図 8 ウカエロシキ (熊の姿岩)

② オプシヌプリ

オキクルミカムイが矢で穴をあけたとされる岩 (図9)。かつては上部がつながり、文字通り穴だった。二風谷ダムの岸にある。



図9 オプシヌプリ (穴あき岩)

『アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観』が文化財としての価値が特に重要な「重要文化的景観」として、2007 (平成 19) 年 7 月に北海道で初めて選定された (図 10)。重要文化的景観の選定区域として、以下の A～F の 6 つの選定区域が定められている。



区域（景観単位）名	所在地・面積
A：ピラウトゥルナイ区域（ペンケ・パンケ） ◇北海道日高地方における里山的景観	平取町字川向、字小平 19,287,600 m ²
B：二風谷区域（ニブタニ） ◇アイヌの伝統を伝える山野と集落の景観	平取町字二風谷 13,022,979 m ²
C：芽生区域（メム） ◇峡谷との対照が際だつ戦後開拓地の景観	平取町字芽生 102,494 m ²
D：宿主別区域（シュクシベツ） ◇牧野・牧野林とスズラン群生地 of 景観	平取町字芽生 3,104,855 m ²
E：額平川区域（ヌカピラ） ◇自然とアイヌの伝統、 開拓の営為が織り成す多文化な河川景観	総主別川河口～額平川・ アブシ川合流点付近間の 河川 2,207,824 m ²
F：沙流川区域（シシリムカ） ◇自然とアイヌの伝統、 開拓の営為が織り成す多文化な河川景観	にぶたに湖上流端～ 新平取大橋間の河川敷地 6,084,550 m ²

図 10 平取鳥獣用文化的景観区域

<http://www.town.biratori.hokkaido.jp/biratori/nibutani/bunkatekikeikan/>

芽生は開拓牧野の風景が残り、スズラン群生地は観光スポットとしても人気を集めているが、群生地は平取ダムの水没予定地になっている。

8) 白老アイヌ博物館見学（3月9日）

民俗芸能の演奏、製作工程の見学などを行った。

5. 調査結果を受けて今後の課題

1) 多様な立場の当事者からの聞き取りの必要性

苫東コモンズ関連：参加ボランティアの方々、移住した農民の方々など。

二風谷関連：ダムに対するさまざまな立場・見解の方、アイヌ文化の調査研究をしている方など。

2) 国の施策と住民との関係性についての研究

住民はいかにして国の施策に賛成、反対、または受容するのか。

他の工業基地計画地やダム建設計画地との比較。

3) 今後の展望

持続可能な社会をつくっていくために考えるべきことを追究。

継承すべきことと、新しく作り出すべきものは何か。

過去の記憶は、地域社会を作り上げる上でどのように作用するのか。

苫東コモンズ関連：かつての開拓地の風景や慣習と現在のコモンズとの関係性。

二風谷関連：アイヌ文化、景観、生活慣習とこれからの地域社会の形成。

Ⅲ. 現代社会学科改称記念連続セミナーの開催

2014年度より人間環境学科から現代社会学科に名称が変更されるのを記念して、次の通り連続セミナーを実施した。

1. 2013年6月27日

「先住民族の権利と近代のライフスタイル - 北極圏にあるノルウェー・アルタからみえてくるもの」上村英明

2. 2013年10月3日

「ジャーナリストは養成できるのか」武田徹

3. 2013年11月21日

「カネミ油症事件の現在」篠田真理子

おわりに

人間環境学科（2014年度から現代社会学科に名称変更）は、現代社会に特徴的な問題を題材にして、環境学・メディア学・社会学などの視点から物事を多角的にとらえ、時代に合った仕組みを提案し、社会を変えていく女性となるための場と機会を提供する学科である。具体的には、食と環境・メディアとコミュニケーション・共生社会をキーワードに、これらの分野から学びを深めていく。本研究は、学科の理念を具現化するため、専門分野の異なる本学科の教員が協力して取り組み始めたものである。本年度は1年目で、手探りで進めてきたところもあるが、第一歩を踏み出すことができたことは大きな前進である。次年度以降も、本学科教員が力

を合わせて、さらに研究を推進していくことができるよう願っている。

本研究の遂行にあたり、多くの方々からご支援・ご協力を得た。これらの方々に感謝いたします。